

令和4年度 第1回ACP作業部会

資料2

○日時：令和4年6月13日（月）午後2時～午後3時

○場所：さくら庁舎35会議室

○内容：わたしノート実践報告

〔わたしノート〕を渡すきっかけ

- ・各施設、サービス事業所で初回面談時に配布
- ・モニタリング時
- ・本人が不安を訴えたとき
- ・グリーフケアとしてお悔やみ訪問の際に渡した。
- ・病状やADLの急激な低下時

〔取り組んだ内容〕

- ・地区民生委員会にて、自分の体験に絡ませ説明。
- ・説明のみで記載はできなかった（ケアを優先したため）
- ・ノートを書いている途中に看取りとなった。
- ・職員への教育（病院・施設）
- ・興味のある多職種に説明（医師・看護師）
- ・毎月、モニタリング時に、本人と家族と一緒に少しずつ記載をしている。

〔良かったこと〕

- ・デイサービスより、少しずつ記入できる人から記入してもらっている。
- ・エンディングノートでイメージはしてくれた 好意的に受け止めてくれた。
- ・グリーフケアとしても使用が可能であることが分かった。
- ・施設入所時はよいきっかけ。担当者会議などで繰り返し見直す機会もできる。
- ・ACPに興味があるスタッフの発掘につながった。
- ・本人・家族・医療者間で情報を共有し合えていれば、文書で残さなくても何とかなると感じている。
- ・少しずつ聞き出せていること。
- ・本人に思い出して語ってもらえていること。
- ・息子さんに本人の思い出の話を残せること。
- ・本人・家族の意思表出する機会となった。
- ・コミュニケーションツールとして活用できた。
- ・本人・家族の意思表出する機会となった。
- ・多職種間の共通認識ができた。

〔悪かったこと〕

- ・退院後の初回面談では「わたしノート」についてあまり触れる時間がなく、中を見たり話したり出来なかった。
- ・サービス事業所と連携しつつ聞き取っていくことが出来ればよい。

(ケアマネージャー、訪問看護など)

- ・ケアを提供する事業所だと時間の確保が難しい。
- ・どの時点においても書き初めにハードルがあり克服が必要。
- ・ノートへの追記や修正などをどのようにすれば良いか迷った。
- ・終末期に書くものだという認識が患者にはある。
- ・80代の女性に、趣味と聞いても・・・。
- ・昔の生活歴をうかがうと、苦しかったことを思い出し涙するなど、メンタルへの負担がかかる場合もある。
- ・全員には渡せていない。説明や渡す時期を迷う。
- ・渡すタイミングが難しい。(特に終末期が近い方)
- ・本人・家族が疾病を理解できていないと渡すことが難しい。
- ・安城市外の方に渡してよいか悩んだ。
- ・配布数が少なく、気軽に渡せない。
- ・口頭で聞いているのであえてノートに残すことはない。

〔市民に伝えたいこと〕

- ・あらかじめ周りの人に自分の思いを伝えてほしい。
 - ・話せる相手を作ってほしい。
 - ・ひとり暮らしの人は地域の民生委員さんや町内会、地域包括などに関わりを持って、家の鍵の場所、何かあったら誰に連絡するかなど決めてほしい。
 - ・看取り期の医療、救急で運ばれた場合どのような処置がされるか等機会があれば学んでほしい。
 - ・自分自身を見つめるきっかけにしてほしい。
 - ・両親の価値観について知る機会になった。
 - ・あまり気構えないで気楽な気持ちで書きましょう。
 - ・誕生日などに書いてみるのもよいのでは。
 - ・「わたしノート」を書くタイミングは人それぞれだが、元気なうちから書いてほしい。
 - ・その人がその人らしく最期まで生きられるように関わりたいと考えている。そのためには、好きなことや、やってみたいこと、目標を大事な人に伝えてほしい。
 - ・家族に、記録していることを伝えてほしい。
 - ・良い取り組みだけど、書かないといわれた介護者の方もいた。
- 仲間内で良い取り組みと思っても、市民が記載したいと思うきっかけは何なのか、理解した上で働きかけることが大事。
- ・自分が代理意思決定人になる可能性があることを理解してほしい。
 - ・元気な方が集まる機会（町内会・敬老会・サロン等）で説明会・講演など行われたら効果があるのでは？